

妊婦のエネルギー摂取不足と成長後の児の脂肪肝発症リスクの関わり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2018-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊東, 宏晃 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3246

ランチョンセミナー

妊婦のエネルギー摂取不足と成長後の児の脂肪肝発症リスクの関わり

伊東宏晃

浜松医科大学附属病院 周産母子センター

欧州の疫学研究を契機として、胎生期における低栄養環境は成長後においてメタボリックシンドローム (MS) を発症するハイリスク群となる可能性が指摘されている。一方、我が国の妊孕世代女性において、強いやせ願望から摂取エネルギーの不足が指摘されており、妊娠中のエネルギー摂取が不足から、看過しがたい数の胎児が、比較的低栄養環境に曝されていることが危惧されている。

近年、胎生期に低栄養環境に曝されることは、MSの肝臓における表現型である非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD) 発症のリスク因子となるという疫学研究が報告されている。しかし、そのメカニズムは解明されておらず、科学的な根拠に基づいた予防戦略は確立されていない。

一方、肝細胞において小胞体ストレスが亢進して「折りたたみ不良タンパク」が細胞内に蓄積することが、肝細胞への脂肪蓄積をもたらす可能性が注目されている。しかし、胎生期の低栄養環境と肝臓の小胞体ストレスとの関わりは明らかではない。

そこで、胎生期に低栄養環境に曝されると、産生仔の肝臓における小胞体ストレスが上昇して肝臓への脂肪蓄積が増悪するという仮説を想定した。そして、母獣の摂餌制限による胎生期低栄養マウスモデルを用いてこの仮説の検証を試みた。実験成績、考察ならびに展望を紹介したい。

伊東宏晃 (いとう ひろあき)

略歴

昭和 61 年 3 月 京都大学医学部医学科卒業
昭和 62 年 10 月 国立姫路病院、医員
昭和 63 年 8 月 県立尼崎病院、技術吏員 (医師)
平成 6 年 7 月 京都大学医学部附属病院 (婦人科学産科学)、助手
平成 8 年 5 月 ウィスコンシン州立大学マジソン校医学部産婦人科、(2 年間)
平成 17 年 3 月 京都大学大学院医学研究科器官外科学 (婦人科学産科学教室)、講師
平成 19 年 2 月 独立行政法人 国立病院機構 大阪医療センター 産婦人科 医員
平成 20 年 7 月 浜松医科大学附属病院 周産母子センター、講師
平成 21 年 4 月 同上、准教授
平成 23 年 1 月 同上、病院教授
平成 23 年 8 月 同上、センター長、診療科長
現在に至る

学術雑誌 Editor

Scientific Reports (ISSN: 2045-2322)

Journal of Developmental Origins of Health and Disease (ISSN: 2040-1744)

Journal of Obstetrics and Gynecology Research (ISSN: 4993-0711)

Medical Biochemistry (ISSN 1027-0256)

DOHaD 研究 (ISSN 2187-2597)